

2023 年度校友会奨学金 選考評 | 一般社団法人多摩美術大学校友会

宮内 友香

日本画の画材からの発想を社会問題につなげてもう一度画材を考えるとという岩絵具信仰に一石を投じるユニークな切り口で鉱物絵の具に依存しない（もう一つの）日本画を志向するところに希望を見た。また東洋的な構造を併せ持つ画面は画材も含め十分な説得力を持った作品になっている。学部3年ということでますます作品の幅が広がっていくものと思うが、この先何に繋がっていくのか、何に繋げるのか非常に興味深く感じた。

北野 茜

ミクロとマクロを接続することが今の分断された社会には必要だとの視点を中心にして作品が作られている。社会的な問題を生命レベルに落とし込み（社会～個人）、自身と同じ時空に生きる別の人間を表現するという。岩絵具の粒立ちを構造に使い写真やドローイングなど、個人的な描きかけをミクロ単位に分解して構成する作業は、時間と根気が必要であろう。その熱意が十分に伝わる作品である。どこまで描き切るか非常に楽しみである。

関 帆乃加

言語化出来ない、はっきりと気持ちが揺れる瞬間を作品化しようとしている。絵画の画面を裏返した様な、身体を伴って外の世界と関わろうとする部分に共感が持てる。

今後、色々な素材と出会って制作していくと思うが、ビジュアルイメージだけに囚われずに、モノが現在までの様に扱われてきたかという歴史や、物質的な構造を成立させる為だけの素材ということではなく、扱う素材を繊細に厳選していくことで、より作品の強度が増していくと思う。

牧野 優希

申請者の書いた文章やこれまでの作品を見ていると、私はそこに工芸的思考（あるいは態度）というものを強く感じます。ある状態のキャンバス（下地）に、絵の具をメディウム（溶剤）と共に道具（筆）を用いて乗せた時に、キャンバス上に何が起きているのかをしっかりと見つめ大切にしてく。そんな「絵の具とのやりとり」を重ねてゆくことが申請者にとっての「描く」ということなのでしょう。そしてそれにより画面上に現れる空間に、申請者は「記憶」をオーバーラップさせている。今後の展開に大いに期待します。

周 文超

応募した研究の内容も興味深いですが、過去の「肌」をテーマにした一連の絵画作品のシリーズがとても印象に残る。こうした観点を持った作家が、海をテーマに制作を行った場合、どういった作品が生まれてくるのか、とても気になる。すでに新しい作品のイメージ図にも、肌をテーマにしていた過去作と同様の斑点状のシミのような図が浮かんでいるのが見える。このシミはおそらく作者が過去作について書いている「鬱血」の部分だと思われるが、海の水面上においてこの「鬱血」はどういった翻訳・解釈がなされるのか、それが重要に思える。

ZHANG Sitian

非当事者が描く「女性像への疑問」に深く頷く。これは女性だけにとどまらず、障害を持つ人、外国人、性的マイノリティなどを非当事者が描く、または演じることへの問いとも通じると考える。美術史から女性にまつわるモチーフを吸い出し、自身の身体を物質的にフィルターのように用いて再びそれらを描く、という創作過程も大変興味深い。

東 菜々美

プランニングする際に、制作者がイメージの中で行う解体と再構築の思考方法を実際の素材を用いてスライドパズルにする方法は、パズルが完成するまでのエントロピーと全体性を置き去りにしているという点で非常に面白い発見であると思う。過去作では板材の木目や、自分の筆跡を「なぞる」という、ある種の「写経」を行っており、所作や扱う素材を理解する方法論としてセンスを感じる。今後の作品において、木材のパズル状態ということは、立体的な物質性を背負うことになるので、素材の厚みや構造をも意識した制作を期待している。

太田 幾

絵画を中心に立体やインスタレーションまで広げた意欲的な作品群だ。これまで「目に見えない...日常での体感をもとに」描いてきたという。ファイルを見ると平面作品だけでは少々窮屈なようで、その感覚をキャンバスの外にも広げたいようだ。様々なメディアを通して、今ここに生きる自分の実感を作品として定着させるのがその意図だ。なるほど作品からは本人の意図の通り、描くことの喜びと自由が感じられる。

武田 歩佑美

計画が何よりもしっかりしていると感銘を受けた。まだまだこのサスティナブルという考えが浸透していない上演芸術の分野にもこのプロジェクトが関わってくれたら大変嬉しいと思う。また、過去作品も興味深く、個人としての自分と社会・世界をしっかり繋げて活動していけるアーティストだと思った。SDGS をファッションのように扱うメディアに対して一石を投じていただきたい。

服部 葵

申請者の作品は「日本」をテーマに掲げている。これは難しいテーマだ。しかし本人もそれはわかっている、様々な時間の交錯を絡ませて一つの解釈に陥らない工夫がある。昔話の中に登場する現代のキャラクターはそのよい例だろう。しかもそのキャラクターはグローバルな問題もはらんでいる。外来種の問題だ。画面の中での様々な争いは実はこの問題を取り上げている。作者のそういった隠れた問題意識を探すのも、作品を見る楽しみの一つになっている。

伊藤 加織

申請者は、人間や自然の生と死、そしてあらゆるものの自然現象の中に神秘性を見つめながら表現を追求しています。銅版画の特徴でもある、黒に向かうまでの豊かな諧調によって、「闇」と同時に「光」、そしてそれらを取り巻く時間までも描き出そうとしています。生命体が歩み続けた膨大な時間のように、銅版に刻まれた線の集積は、精神の奥を探求し新たな表現へと導いています。今後の制作を多いに期待しております。

細井 茶生

以前の立体制作では仕掛けの部分（主に型）に多大な時間と労力を奪われることにストレスも感じていたという申請者は、都度都度の焼き付けという面倒はあるものの直接描き重ねてゆける今の手法を得てのびのびと制作できている様に見えます。なによりも平滑なガラス面だからこそ容易となる、エナメル顔料を乗せそして掻き落とすことによって生まれる色彩や線はただただ美しいと思います。そうして紡がれる物語の展開に期待しています。

野口 駆

近年急速に発達し、かつその有用性や意義について議論されている生成形 AI を用いた表現に対し、自らの身体を介入させるという、独自の観点と方法から関係性を構築しようとする姿勢が評価できる。資料にある計画も具体的で、リファレンスも適切で充実した内容になっている。

生成形 AI の使用が目を引くが、実のところこの作品において「コミュニケーション」とは何かが本質的な問題になってくると思うので、その点についての思考が制作を通じて深まってほしい。

李 燦辰

申請者は、水彩絵具、インク、染料、アクリル絵具等、水を媒体とするすべての素材を創作の目的に応じて組み合わせながら制作を行っています。それは、絵具と水を用いることで、にじみやぼかしのようにコントロール出来ない表情、形が生まれ、作者を理性の呪縛から解放へと導いています。そして、意識下に眠っている神秘的な表現へと繋がっていると感じます。今後の作品の展開、また研究にも多いに期待をしております。

WANG FAN

本研究は各地が抱える少子高齢化、過疎化などの社会問題を動機・背景とし、人に不可欠な「食」と「住」を柱としたシェアハウスによる地域コミュニティ再生に挑もうとしている。研究計画書と申請者の取り組んできた野菜直売所「へたうま」ブランディングデザインによるフードロス解決への提案等から、課題解決の具体的な視点と意欲、力量が伺える。建築とグラフィックデザインを学んできた申請者ならではの研究成果に期待したい。

村岡 莉帆

申請者が1年次より積み重ねた学びをもとに卒業制作に取り組む姿勢が伝わる研究計画となっています。染色実験を繰り返すことで偶発的な現象が必然となり、揺るぎない美しさとして表現できるよう、更なる探求を深めてください。コンセプトを表現する技法の必然性を丁寧に考え取り組んでいることが伝わりますが、理屈を超えた美しさで観る人を魅了する作品になることを期待します。

大内田 光

これまでの経緯を見ると申請者は興味の幅がとても広く、卒業制作では具体的な空間のデザインではなく、ものの見方、感じ方へのある種の問題提起になっている。応募テーマだけを見ると卒業制作の延長のようにも見えるが、研究計画によると実在する都市のリサーチを経て最終的には現実の空間をデザインすることを通して空間と人間の知覚能力の関係に言及しようとしている。予定されている交換留学の成果とともに展開が楽しみである。

王 欣悦

日常の中で嫌でも聞こえてくる音。他の環境的な煩わしさはある程度避けようと思えばなんとかかなりそうであるが、音と匂いからは逃れられない。そこに着目して、音環境・音風景の研究に取り組むことはとても有意義な事である。今後の研究で気をつけて頂きたいことは、環境音が音楽になったり、音と音が組み合わせられると、単独では心地良いものが、不快な音と感ずることがあること。その辺りも含めて、複合的に研究を行い成果を出して頂ければと願う。

QI YAXUAN

社会と個人のつながりの可視化をテーマに、世界と歴史を横断する綿密なリサーチを持って取り組むプロジェクトである。リサーチ計画の精密さも素晴らしいが、インスタレーション、映像、写真などの複合的表現にチャレンジすることによって新たな言語を表現しようとする姿勢が高評価であった。また、キーワードのひとつとして記述されている「隠された言葉」は、現代の社会の中で普遍的な問いでもある。本プロジェクトを通して、新たな発見が生まれることを期待している。

小倉 達郎

申請者の研究は、河原温が1950年代に日本で活動した内容に着目したものである。調査研究が進んでいない時代の作品および資料調査を実施するための明確な目的と研究方法及び計画が提示されている。この研究により河原温の後年の作品群との関連性が明らかになり研究の推進が見込まれる。